

浄土

3
1994

巻頭エッセイ

松本裕美

旅

夏 攸吾

好評連載

利根川 裕 吉川英明 稲葉小太郎

エッセイ

加藤ひろむ

新連載 念仏信仰と武士道 高橋富雄



法然上人鑽仰会発行

心 行きかう道標。



優しい気持ちに戻って、

大切な人と

話したい時間がある。

人と人との思いやり、

心をこめてかわす会話。

毎日の暮らしの中の道標。

0088はあなたにとって

そんな存在になりたいと

考えています。

ますますおトクになりました。

0088はご加入にかかる費用も、基本料金も無料です。

お申し込み・お問い合わせは、日本テレコムお客様センターへ

フリーコール ☎ **0088-82(無料)**

または

☎ **0120-0088-82(無料)**

● 受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

日本を楽しくする電話

0088

遠州の春

写真 夏 攸 吾

春を呼ぶ……遠州横須賀風揚げまつり





遠州横須賀倶楽部の人びと 「べっかこう」は観光協会長(家老)(左)、「巴」は城代(筆頭家老)(右)



割烹旅館八百甚の主人



横須家風を伝承する柳瀬提灯店主



「ねりきち」の春祭り、三熊野神社大祭



清水邸庭園の茶室「湧水亭」



ジューシーなイチゴ「アイベリー」



春に「まず咲く」、三ヶ日町のマンサクの花



羽をやすめる奥浜名湖の鴨たち(細江町)

浄土

1994/3月号



目次

[カラー口絵] 遠州の春.....写真=夏 攸吾	3
ゴーリー・シャンカール・マンデル.....松本裕美	8
遠州の春.....夏 攸吾	18
テレビキャスターのアンクル——⑦	
観客人生の怖れ.....利根川 裕	26
[新連載]	
念仏信仰と武士道.....高橋富雄	32
午後の日差しの中で——⑧	
めぐり会い(三).....吉川英明	42
現代の快僧——その2	
死に立ち向かう 曹洞宗 龍宝寺住職 中野東禅さん...稲葉小太郎	50
“残る桜”と“散る桜”.....加藤ひろむ	62
編集後記.....	70

表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下

表紙撮影=落合泰三

目次・編集後記イラストレーション=田村直巳

ゴーリィ・シヤンカール・マンデル



松本裕美

ヒンズー教徒でもない私を

招き入れてくれる祈りの輪の中で

いろいろなことありがとう……と念ずると

この旅も何かいいことに出会えそうな気がする

素敵な布や不思議な道具類が無尽蔵にある

国ではあるけれど

私を魅きつけて離さないのは

神様の配慮で暮らす

この国の人たちの生きる形のような気がする

これは昨冬、私の店の展示会のために、お客
様に出したダイレクトメールの拙文です。

二十代をヒッピーまがいの旅を続けた私は、旅した国々の中から妙に相性のいい国だとインドを認めて以来、この国との付き合いをいつまでもと思い、インドの草花染布や道具類を扱う店を始めました。若い頃の約三年に及んだ長旅のおかげで、この国が素晴らしい布や道具類にあふれていることを知るとともに、各地に多くの友人を得ていました。

現在、旅の方法は、お金はないけれど時間がたっぷりあったあの頃とは逆に、多少のお金はあるけれど時間を制限された急ぎ足の旅に変わり、そしてまた、私がインドを見る目も、経験不足ではあるけれど、好奇心だけは旺盛だった若者から、仕事としての条件や多少の分別をわきまえる年の視点に変わってしまいました。しかし、インドが私に与えてくれる興奮は、かつての旅と少しも違うものではありません。む

しろ現在の方がインドから教えられることが多くなっているような気がします。多いときは年に三度も行くこともあります。毎回インドを離陸するとき、「今度はいつこようか」と、次の旅を予定し、この予定を実行するために働いているようなところもあります。

四十代も半ばにさしかかった今の私は、日本で現実の生活をこなしながら、「一年のうちの数週間をインドの大地で過ごすときの解放感と安堵感是一体何なんだろう」と考えます。

成田を正午過ぎに発つエア・インディアの定期便が、デリーに到着するのは夕方六時前。何度も往復するうちに、八時間の空の旅も三時間半の時差も気になることがなくなりました。

到着の日ほどほどにし、翌朝のオールド・デリーにあるヒンズー教寺院「ゴリー・シャ

ンカール・マンデルでの礼拝から私の旅のスタートになります。

いつの頃からか、私はこのヒンズー教寺院で「またやってきましたよ」と報告することを旅程に組み入れています。二十代の若いときの旅が、一日をいかに安く過ごせるか、というかなり切り詰めた旅だったせい、この年になってもニュー・デリーの近代建築のホテルやオフィスを、あまり居心地の良い場所としません。好んで人々のごった返す雑踏の中へ中へと入りこんで行きます。言葉も多少わかりかけているし、何よりも市井のインド人の中にまぎれ込むほうが、インドと親密に付き合える気がするからです。

茶店に入れば、束の間の休息を取る男たちと並んで、甘いチャイ（紅茶）をすすることがができますし、インドテイの作り方も学べます。

健気に働くコップ洗いの少年を見ることがもできます。そして、「おそらくこの子は親孝行だろうなあ」なんて勝手な空想もできます。また、安食堂に入れば、手づかみてカレーを食べられます。

ここには物乞いも来るし、ヒンズーの行者も托鉢に立ち寄ります。運がよければ、門付けの歌うたいや軽業師たちにも会えます。背広を着た裕福そうなインド人に、「日本のどこから来ましたが、東京？」などと聞かれるよりは、まばたきもしない強引な目つきで見つめられるほうがずっと心地よいのです。

早朝六時のホテルはまだ寝静まっています。フロントを通り抜けて表に出て、流しのオートリキシャ（三輪車）をつかまえ、「ゴーリー・シヤンカール・マンデル」と告げると、大抵の運転手は「へえ」という顔をしますが、そこが

どんな所か知っている彼らは、運賃をごまかすこともなく、早朝の街を走り抜けていきます。

外国人をごまかすことは彼らにとつて役得みないなものだけれど、この早朝のお寺参りだけは不思議とごまかされたことはありません。

デリーは、政治都市のニュー・デリーと商業街のオールド・デリーに分けられていて、近頃ではニュー・デリーも早朝の公園でジョギングをしたり太極拳をする人たちが多く、ずいぶんとモダンな風景になってきましたが、一方、オールド・デリーのほうはというと、様子はまるで違っています。六時ともなると人々の活動開始となり、それはあと四、五時間後にやってくる、収拾のつかない喧騒に向かってわき起こってくるうねりのようです。誰かがインドの雑踏をたえて、「人間の佃煮みたいだ」と表現したことがあったけれど、実に言い得ていると苦笑し

たものです。そんなふうな混雑に向かってスタートしようとする時刻なのです。

大通りはすでに車や自転車やスクーター、人力車や人や牛やリヤカーが自分勝手に目的地に向かい、クラクションや排気ガスがたちこめはじめ、その中、そこにいる路上生活者がくまっている薄布からやっと上体を起き上がらせてきます。今日一日、彼らはまともな食事に取りつけるでしょう。道路つべりのバラック小屋から、ドーティ（腰巻き）一枚の男が筋骨隆々の体で出てきます。彼らもまた、今日一日どんな仕事につけるのでしょうか。人力車夫は車輪に油をさして調整していますし、犬は片足を引いて道を渡り、食肉市場に向かう長い羊の列も見えます。頭上にニワトリかごを何段も乗せていく男、野菜の荷車を押す男、麻袋を担ぐ人、彼らはまるで何か仕掛けでもあるように、

痩せた体に不釣り合いなほどの大荷物を持ち上げています。手押し車の屋台の主人は線香をともして、今日一日の商いを願ひ、盲人も物乞いも体の不自由な人も、新しい始まりの朝のために動きはじめる時間です。洗濯屋も染物屋も木工屋や鍛冶屋も石炭の火をおこし、食堂の親父も玉ネギきざみに夢中です。菓子屋もミルクを煮

詰めはじめ、見渡せば数えきれない仕事の数々が、それぞれの朝を始めているのです。

こんな風景を見ていると、私は日本ではほとんど見られなくなってしまうた人の形、姿態の美しさに息をのむことがあります。ぜい肉のそぎ落ちた、強靱な肉体が目の前にあるのです。それらの肉体を見続けていると、彼らの精神も

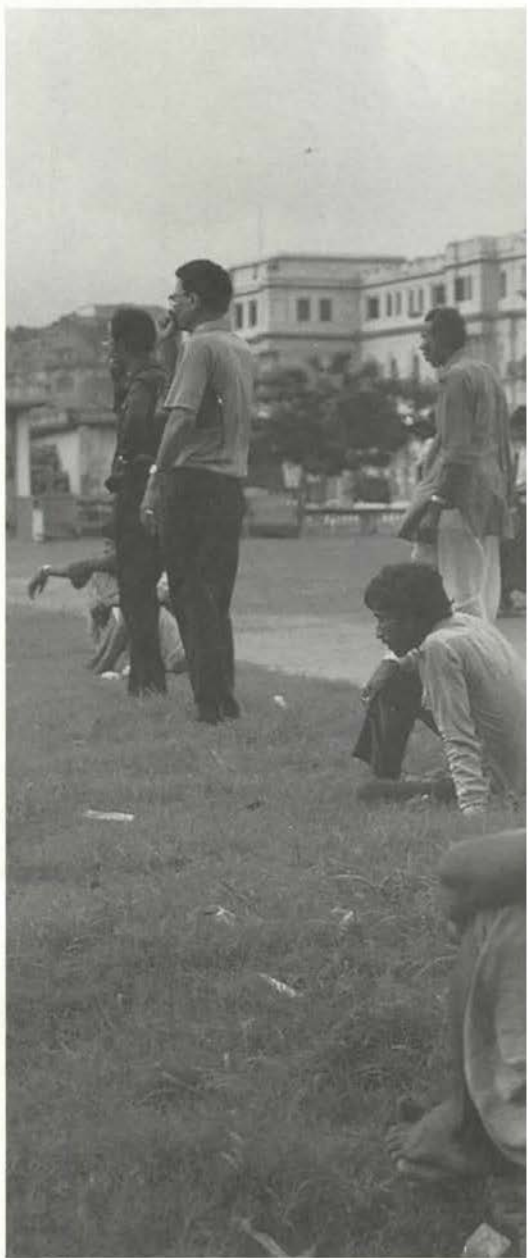


また優しく強いのだろうと思えてきます。

こうした風景の中を、私を乗せたオートリキ
シヤは走って行きます。

目指す「ゴーリー・シャンカール・マンデル」

はオールド・デリー一番の繁華街であるチャンド
ニーチョークの中にあります。外観には寺の
目印になるものがありませんから、昼間ここを
訪ねると、周辺の雑踏に押されて気づかずに通



り過ぎてしまいます。早朝のこの時間帯だけが、
あたりとは少し違う雰囲気です。独立しているの
で

入口に立ち止まっていると、参拝者をあてに
した物乞いがどこからか擦り寄って来て、細い
腕を差し出します。そして、少し離れた所
には、毎朝の食事の布施を待つ、貧しい人た
ちの長い列が続きます。一度この光景をながめて

いると、「一緒に並ばないか」と誘われてしまいました。寺の入口間近のところには、お供え用のマリーゴールドの花が人影を隠すほどの小山になって、いくつも積み上げられ、強烈な黄色と匂いであたりを圧迫しています。一体これほどの花をどこから摘んできたのだらう、と思うほどの量です。マリーゴールドの黄色は、ヒンズー教のお坊さんの衣の色でもあります。

寺の本堂は、通りから少し高いところにあるために、中まで入って参拝するのではなく、本堂に通じる階段の前に立ち止まって一礼していく人や、階段まですり寄って額をこすりつけていく人たちもいます。それは「おはよう」の挨拶のようにさりげなく気持ちのいいながめです。

私も集まってくる人たちに続いて一四二ルピ（約八円）の花皿を買い、靴を預けて素足で狭い大理石の階段を登ります。階段は毎日毎日

の大勢の信者の足で磨かれ、真ん中ほど薄く窪みもできています。

登りつめた奥にお堂があり、この寺のシンボル、リング・ニョギ（男根と女陰の結合体）の石像に群がる人だかりが目に入ります。直径一メートルはあろうと思われる女陰の石像の真ん中に、黒光りのする巨大な卵形をした男根が埋め込まれ、人々は持ち寄った牛乳や寺の井戸から汲み上げた聖水を注いで、石像を撫ぜまわしています。そして女陰の溝に溜まった聖水やら牛乳やらを口に含んだり、額に塗ったり、また石像に額を押しつけたり、マリーゴールドの花弁を貼りつけたりもしています。それぞれがそれぞれのやり方で祈っています。

朝のこの時間は、絶え間なく来る人がご神体に水や牛乳をかけ続けるから、水はけの悪い堂内の床には黄色い花卉が散らばり、乳濁色の水

が淀んで裸足の裏を妙な感覚で刺激します。彼らインド人にとっては祝福の水でも、外国人には気持ち悪く、第一不衛生です。時には堂内に聖水があることもあり、牛のお小水が混じることもあります。しかし、牛乳と聖水の混ざったこの聖水も、人々の足裏の体温で温められ、慣れれば結構肉感的で気持ちのいいものです。

六時半になると、奥にある十体ほどの神像の前で参拝者たちの声明が始まります。私が好きなのはこの声明の声です。神像を取り囲むようにして歌う輪の後方にまぎれこむと、私に気づいてくれた参拝者の誰かが、「さあ、こっちへお入りなさい」と前方に押しやってくれます。女性の前、男性は後ろというのがこの寺のルールのようで、私が外国人であることは問題ではないようです。

彼らの輪の中で日本風に手を合わせていると、

人々の声が最後の昂まりに達するころ、ご神体の間近にいた祭司が聖水の入った鉢を抱いて近寄り、人々の頭上にまんべんなく水をふりかけます。その丁寧な水のはじき方、また、その聖水を絶対に浴びようと身を乗り出す人々の様は、神さまと彼らの親愛なる関係を見る思いがします。

私にも聖水がふりかけられます。次に灯明の入った小皿が順番に、私にも廻されます。体全体が灯明の煙で包みこまれるとき、どうみても異教徒の私を、彼らが彼らなりの流儀で祝福を与えてくれることに、私はインド人の限りなおおらかさと神さまの抱擁を感じて胸が熱くなります。

私が手を合わせていると、その手をほどいてフラサードと呼ばれる神さまからのお下りの砂糖菓子を掌に入れてくれます。私がこの寺に



いるわずか三十分の間は、自分が仕事でインドに来ていたことや、ここがインドであることも忘れて、私の周りで同じように頭を垂れている人たちと一緒に今を生きている思いがします。神像を見渡せば、どれも極彩色でケバケバしく、日本の寺院のように厳かな演出とはまったく無縁ですが、この場に漂う不可思議な気配は、私がどこの誰であるかもお構いなしの神さまの子供でいられます。

この数年間、私はこの寺のヒンズー教の鐘の

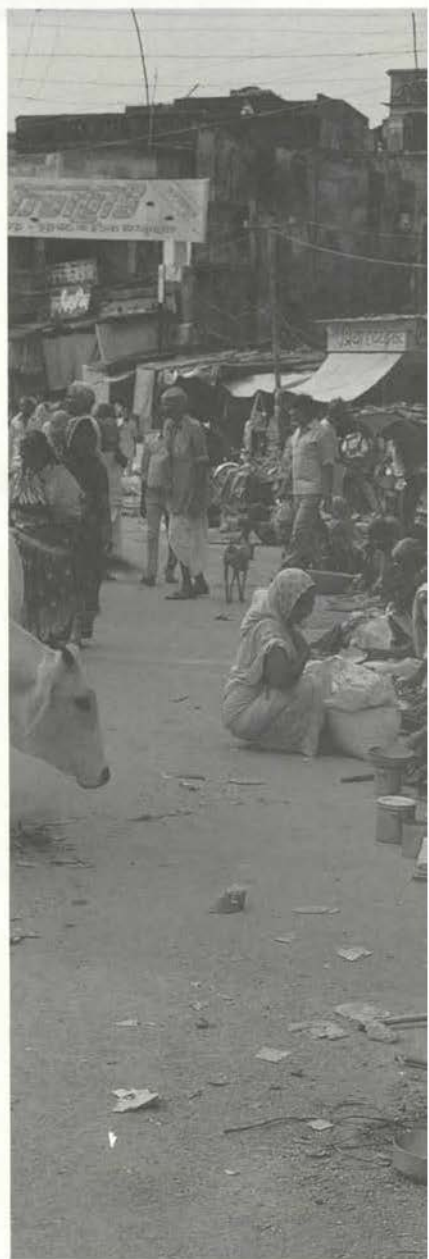
音と、灯明と線香の香りの中で、幾度自分のことを祈ったでしょうか。時には病床の父であったり、突然逝ってしまった母と兄であったり、夫の仕事や子供たちの健康のことなど手を合わせて祈りました。

このゴーリー・シヤンカール・マンデルの朝の礼拝にやって来る人々は、いかにも信心深い老人から、子供を連れた父親、婚礼間近そうな娘を伴う両親、出勤前の日課にしているふうな青年、登校前の少年、かれらのだれもが真剣に、

というのではなく、真面目に頭を垂れて帰って
いきます。

こうした姿を見ていると、私は、自分の中に
神さまを宿らせている彼らを、ふとうらやまし
いと思うことがあります。神さまが自分を見て
いる、と一呼吸おくと、もろもろの性急な答
え出しから開放されているような気がしてなり
ません。

インドを流れる悠久と呼ばれる時間の流れは、
どうもこの辺にもわけがあるように思えます。



一度、インドの友人が「今年のぼくの神さま暦
では、全日曜日に絶食しなければならないんだ」
と言うから、私は「へえ、悟りでも開くつもり」
と茶化して聞いた。だして見たら、「ええ」と素
直に答えられて困ったことがありました。

彼らが神さまを話題にするとき、本当に真面
目なのだと思います。気がしたものです。そし
てまた、彼らは神さまとともにあり、生きてい
るのです。

(インド民芸店店主)



遠州の春

文と写真—夏 攸吾

マンサクの花

私の属する会に、日本旅のペンクラブ、というのがある。

その縁で、忙しいときには目をとおしきれないほど、各地からおりの情報^が寄せられる。なかでも、毎月きめこまかな提供いちばんは、静岡県東京事務所観光案内所、所長のMさんは

業界有名人のひとりだ。

このたびは、その静岡県からの情報に誘われて遠州への旅。春さきがけの話をしようとおもう。この冬はあたりまえに寒く、東京でも雪だるま、つくれるくらいの降雪^があり、とじこもりがちに過ごしたから、体^がかなりなまっていたせい、もある。

まず、マンサクの花を見たかった。



奥浜名湖の春(左)細江町の
春祭り「姫様道中」(下)

私はだいたい花より団子、食えない植物には疎いほうで、偉そうなことはいえないのだが、それでもいくつかは惚れこんだ花があつて、そのひとつがマンサク。

ようやく雪どけの春おそい陸奥、枯れた山肌にはじめて出逢ったときの、黄金色にはじめて出逢ったときの、すなおな感動は忘れ難い。

豊年「満作」の花、と教えてくれた老爺の、ほころぶ顔がよかったので、私のこのころのあて字は、ずっと「万作」だった。マンサクはまた、春まつさきに咲く「まずさく」からともいう。

太平洋側の南限といわれる、蜜柑で有名な三ヶ日町のマンサク群落は、浜



名湖をのぞむ鶴代の平那の峯。俳諧季語では「金縷梅」とも書いて葉の芽吹

空も海も澄んだ早春の遠州灘



く前、枝にしがみつくように咲く四弁花はかぼそく、ひとつひとつでは頼りないが、群れて風の子の遊戯となる。

おりから立春。寒の明けとはいえ山の空気はまだ冷たくて、豊年踊りを連想させるといふ、ねじれ咲きの勢いいまひとつ。けれど、いちめんの菜の花よりも私にはうれしい春だ。

このあたり奥浜名湖はそのむかし、磐田^{いわた}の見付宿^{みつけ}から豊川の御油宿^{ごあぶ}まで、東海道の脇街道、俗に「姫街道」と呼ばれた道すじ、隣りの細江町には、石畳の旧道^{ふるみち}がのこる。

浜名湖の水上には、もうじき北国へ帰る鴨の群れ、吹きすさぶ風に首をうずめて漂い、しかし近よればちゃんと

察知してすいと安全な距離を保つ。でかける前、東日本橋の老舗「鳥安」で合鴨に舌鼓をうってきたばかりの私には、殺生の気配濃かったのか……。

細江町には春四月の第一土・日曜、姫街道に因む「姫様道中」、湖にそそぐ都田川の桜堤に、二十歳^{はたち}の娘ざかり句う祭りもある。

県営の国民宿舎奥浜名湖は、このての施設では破格の「すっぱん料理」^がが名物。個人的にもながいつきあいの、支配人Oさん、元支配人で現在は天竜川水系三遠信（三州・遠州・信州）の郷土史家Mさんと、旧交あたためつつ飲む。おかたは開けた静岡県にあって、天竜の奥だけはいまだ秘境、いず



れMさんの案内でご紹介する機会がある
ろうと思う。

風、風、あがれ

翌日、大須賀町に向かう。海亀の産
卵で知られる御前崎から、西へと続く
遠州灘に面したこの町も、まだ知名度

は低い。

こういう場合の常套で歴史から語れ
ば、ここ遠州は戦国時代、徳川・武田
の両雄が合戦に明け暮れたところ。天
下分け目の長篠の戦いに敗れた武田勝
頼が、最後の砦とした高天神城を攻め
るため、徳川家康が築かせた砦のひと
つ、横須賀城の城下町である。

現在は城跡がのこるのみの小さな町
だが、そこに、じつに小気味よく気の
きいた産物が揃う。かぞえあげてみよ
う。

添加物一切なし手造り薄塩「糀屋」
の味噌、天然醸造自然食品「栄醤油」、
町おこし事業で復活した昔ながらの香
り高い黒砂糖「よこすかしろ」。これら

東京にもフアンの多い愛宕
下羊羹店



基本調味料に加えて、銘醸地酒「葵天下」あり、売り切れ店じまいの「愛宕下羊羹」や「大竹まんじゅう」など和菓子のレベルも高い、魅菓子もある。

恵まれた平地の畑には「マスクメロン」の温室、都会では目の飛び出るほど高価な果物の王様が、「八百友」に比べ半値より安く買えてしまうし、昔なつかしい乾燥芋の風景もこの時期。小さな木工所でわが国伝統の包装材料、経木を作っていたりもするのだ。

大きな町なら驚かない、コンパクトな、自給自足感のなかでの顔見せだから嬉しいのである。もっとも、聞けば「近ごろは自足のほうがおもしろくない」という……。

話しがどうしても、食い気に傾く。そう、私は風を見にきたのだった。明日、恒例の「風揚げまつり」がある。

この町には、横須賀風という民芸品があり、合戦の敵陣偵察や通信に使われたのが始まりとか。いろいろな形があるなかで、おもしろいのは、三河万歳の顔が大きな赤い舌をだす「べっかう」、丸と菱と扇を組み合わせた「巴」、ご祝儀そのまんまの「のし」、鉾に似せた形の「とんがり」など。

横須賀風を伝承する柳瀬さんの店。けれど、仕事のほうは本業の提灯づくりに忙しかった。

大須賀町のカーニバルは、四月第一土・日曜の三熊野神社大祭。じつは、

「ねりきち」若衆が大須賀
町の元気のもと



私もその興奮を味わって、ますますこの町が好きになったのだが、その祭礼用提灯の張り替えてある。

三熊野神社の祭りは、神輿の渡御に華やかな十三台の山車「柵里」が従う。柵里に群がる若衆を「ねりきち」と呼び、江戸は葛西囃子の流れをくむ三社祭礼囃子にあわせて酔い、「シタシタ」と掛け声もばか陽気に、浮かれ賑やかに練り歩く。

祭りきちがいの町はよい、その勢い若者が支えているから……。

この町が東京で知られるようになったのは七年前、商工会を母体に「遠州横須賀ルネッサンス」のスローガンを掲げ、遠州横須賀倶楽部が旗揚げしてからだ。

はじめて大須賀を訪れたとき、彼らはいちばんに「ねりきちの町」を表明



し、だから町おこしの方針は「本物の提供にプラス遊び心」だといきった。とうぜんその活動ぶりには、お役所でやるようなシカメツラシサはなく、親しみがもてて気持ちいい、いつも「ねりきち」みたいなもん。

その夜は、創業二〇〇余年という旅籠風情の旅館八百甚に旅装をとき、コハダのつみれ鍋を味わう……。

ばっちり、からりと晴れた日曜日。刈り入れのすんだ田を会場に、風揚げまつり、盛り上がる。「風きち」も、ずいぶんいっぱいいるのだった。

浜松の風、浜北の風、豊橋の風など東海地方の名物風を集め、東京からの参加者もあって、この祭りは風の会の

競演でもある。

ひとつスルスルと揚げて見せて、腕前を披露し嘆声を浴び、満足したら下ろして次のを揚げる、あいまに弁当をひろげ、酒や茶を飲み……飽きることがない。

観衆もピクニック気分で、形も大きさもさまざまな風が一度に五〇あまりも天高く舞うのを、見上げて堪能する。こよなく健康、目にもやさしく、かきのじぶんに夢中になった風系の感触おもしろい。

昼すぎまで遊んで、「いちご摘み村」に行ってみる。ここは、ひとつぶが一〇〇グラム以上もある、めずらしいアイベリーの食べ放題。いちご作り名

「風揚げまつり」で一番人
気を集めた連風



人、赤堀さんのアイペリーの、内から光
り輝くような色艶のよさに感動する。
すつきりとジューシーな甘味、女峰よ

りいちまい上手で後口もよい。いまは
やりのパイオではなく、品種改良の積
み重ねと聞いて、ほっとした。

江戸時代の回船問屋、跡地にできた
清水邸庭園の茶室で抹茶をいただき、
上品にしめくくる。庭に湧く清水が、
この町を伏流する地下水の水質のよさ
を物語っていた。

これらは、国道筋にできた物産セン
ター「サンサンファーム」とともに、
大須賀町の観光合戦、これまでの陣取
りから、いよいよ攻勢の火ぶたをきつ
たことを意味する。

じつは、ここからさががむずかし、
まさに正念場、うまくし遂げてほしい
と想う。

観客人生の怖れ

利根川 裕

さいきん「観客政治」という言葉が、かなり流行している。

テレビの政治ニュースや、政治討論番組が、かつてないほど視聴率が高くなつてきている。そういう気運をいち早くとりあげて、主に主婦向けのワイドショーにも政治家の登場することが多くなつて

いる。

また、テレビ局の試みる各種の政治アンケートや世論調査に応じてくれる人の数も、かなり増加している。街の声として、街頭での政治的インタビュにも、多くの人が活発に参加してくれるようになった。

テレビにあらわれたこういう現象からすれば、国民の政治関心や政治意識がかなりの高まりをもつようになった、といえそうである。

が、じつはそうとはいいい切れない。早い話、選挙の投票率がいつこうに伸びないのである。伸びないどころか、減る一

方である。さきの衆院総選挙でも、自民党一党長期政権打破とか、五十五年体制の崩壊とか、政治改革の急務とか、民意を問うに足る大テーマがあつて、事実テレビをはじめとするマスコミは連日そういうテーマをめぐって大いに活気づいていたのである。にもかかわらず、投票率はかなり落ちこんでいた。

知事たち地方首長の政治スキヤンダルが天下の話題となつて、辞任した首長に代わる新しい首長選挙となれば、有権者は投票所へ向かつていいはずである。が、これまた、まったく投票率は高くならないで、軒並み五十パーセントを割つてしまふ状態である。

以上のような現象をさして、「観客政治」という言葉が生れた。

政治を観客としてみることに興味があるが、投票行動をとつて政治に参加することには、ほとんど関心がないのである。

このことは、政治がテレビ的見世物化したということであり、見世物以上のもの

のではなくったのではないか、という憂うべき事態を予想させる。

おそらく、細川首相はこの「観客政治」のスターなのである。細川首相が例の国民福祉税をいいだす前まで、テレビをはじめとするマスコミの世論調査では、空前の高い人気を維持しつづけた。

そして、細川首相自身、マスコミ観客向けのパフォーマンスを好んで演じてみせている。

細川首相は強い政党的基盤をもたないことから、観客の支持の上に政権強化をはかるしかない、という事情がある。

かくして、「観客政治」の傾向にいつそう拍車のかかってゆく状態である。

テレビによって、政治は著しく政治ショー化しつつある。激論仕立ての政治討論番組は、なかなか活気がある。国会内の質疑応答ぶりは、はるかに面白い。それはそれで結構なのだが、討論番組のテレビ制作側も、また出演政治家も、いかに見せ場を作るかに吸々として、冷静で緻密な正論よりも、観客受けする手ぶり身ぶりや語り口で、テーマをスローガン化してゆくことになりがちである。

「政治改革」という言葉も、そのスローガン化の端的な例であった。政治改革の内容は、本来は現行の選挙制度を見直すことと、金のからむ腐敗防止策をどう作りだすかを根幹とするものである。

そして、さしあたっては選挙制度に議論が集中した。例の小選挙区比例制をめぐっての議論である。

政治改革の一環として選挙制度を見直そう、というのは、みんなが賛成するところであろう。が、果たして小選挙区比例制がいいかどうかは、かなり議論の分かれるところである。

ところが、マスコミ論調としては、いつのまにか、政治改革と小選挙区比例制とはワンセットのものとなり、この小選挙区比例制に反対するものは、政治改革への造反者である、という図式が出来てしまった。

かつての戦争中は、国家権力の推し進

めようとする戦争体制に少しでも批判を加えたら、非国民というレッテルをはられて迫害されていた。わたしたちには、それへの痛切な反省があつたはずである。にもかかわらず、いまはマスコミがテーマをスローガン化して流布させてゆき、そのスローガンに批判的なものを造反者とみなすようになっている。

マスコミが善玉と悪玉の二派を作りあげ、その双方をたきつけて大いに激論風なショーに仕立ててみせ、そして一般の視聴者はそれを、なかなか面白い見せ物として見ることになる。このさい視聴者は観客であり、出演者たちはどうしたら観客に受けるかに心を砕く演技者となる。

そして、こういうテレビ的マスコミ現象の中で、政治の実体はどんどんと瘠せていつているのではないか。

テレビは映像をもつマスメディアである。映像があるということは、目に見えるということである。見た目の効果の上に成立しているマスメディアである。だから、このメディアは、本質的にすべてのものをショーアップしようとする。そして、どうしたら観客動員できるかにメディア自身の生存を賭けることになる。オリンピックは、衛星をキーステーションとするテレビによって、全世界の数十億の人間も観客とする。スポーツはテレビメディアによって、膨大なスポーツ

観客を生みだした。

昨年来の日本のプロ・サッカーのＪリーグ人気は、テレビを抜きにしては考えられない現象であった。

スポーツの世界だったら、それでもいい。また、もともと観客のため仕組まれるショービジネスや各種のイベントだったら、それでもいい。

しかし、わたしたちの生きている人生全般が、ショー化されたり、イベント化されたりして、ショー的なもの、イベント的なものこそが人生の本質であるかのようなメディア現象は、たいへん危険なことである。

わたしはかねがね、テレビというもの

は、戦争革命、反乱、犯罪を含むあらゆる人間的現象を、ショー化し、イベント化し、ゲーム化してしまう危険を内に含んでいるものではないか、と感じてきている。

わたしたちは、テレビによって、全世界で起きる人間的事件や人間的現象を見ることが出来るようになった。そのかぎり、わたしたちの見聞は大いにひろまり、さまざまなものに関心を持ちうるようになった。

が、そのことによって、わたしたちの人間的体験は豊かになり、深くなっているであろうか。

むしろわたしたちは、あらゆる人間的

事件や人間的現象をたんなる見物人、たんなる観客として見、それで終わってしまふことに馴らされてきたのではないか。「観客政治」という。政治を一種のショーイベントのように受けとめ、それ以上の自分の責任としては政治に関わろうともしない風潮がテレビによって生みだされたが、じつは、こういう観客化現象は、政治に対してだけではなく、人生一般に対しても生まれつつあるのではないか。

観客人生とても名づけようか。自分の人生を含めて、すべての人間の人生を、まるでショーのように見るところに、人生の真実の中身があまりはしまい。

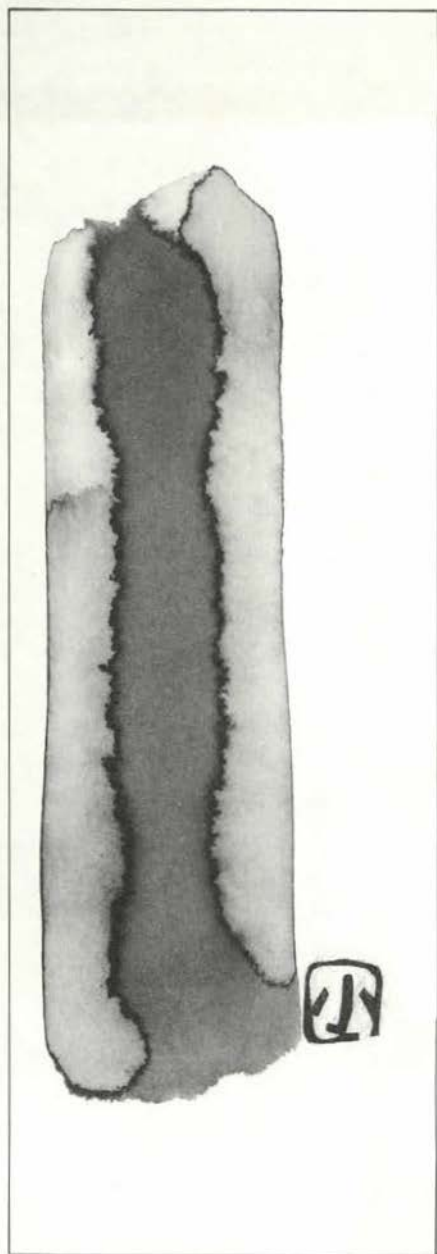
（テレビ朝日系キャスター・作家）

連載 第1回

念仏信仰と武士道

高橋富雄

イラストレーション—小菅 遼



(これは平成四年四月、仙台で行なわれた「浄土宗布教師大会」の講演録です)

武士と呼ばれる人たちは、農村の生活の中から、自活・自衛する集団として歴史に生きた人たちです。ですから、この人たちの人の道というのは、基本的に「存在の論理」に立っていました。そこで、武士道が本当の意味で道としての自覚を持つようになるのは、やはり儒教のようなものとのめぐり会わないと、本当の意味の道徳という自覚には至り着き得なかったのではないかと思います。

そしてさらに、今度はそれが道徳以上のものになって、いつも死というものと隣り合わせて生を生きなければならぬ武士たちにとって、その道というのは単なる人間次元の道徳であることはあり得ないのでございます。いつも死というものをどういうふうに迎える生であるかというところまでいかないと、武士道は本当の意

味の安心立命には至り着き得ないのでございます。

そのことを彼らは、生活の中で実感しているのでございます。そして、そういう心構えが何も特別なことでなく、武士として生きている限り、当然そういうことになるのだという、静かな安心立命の境地に至り着いたところ。それは仏教だったと思っているのですけれども、それはひよつとすると、普通歴史で強調されているように、禪というようなものであるよりも（もちろん禪である場合もしばしばあったと思いますが）より多く、そしてより深く、かえって往生念仏の思想ではなかったのかというふうに私は考えるようになっていたのでございます。

そして、その考え方を最も深くさせられたものの、それはほかならない『法然上人行状画（絵）』

図へ勅修御伝、四十八巻伝」というものでございます。ここには信仰を持った鎌倉武士たちがどういうふうになら上人様を仰ぎ、どういうふうになら様の教えを承り、それを実行しようとしたかについて、大変詳しく、生々しく記されているのでございます。おそらく、皆さん方、先生のような方にとっては、これは法然上人伝であるわけですから、立派な祖師さまの宗教人としての教え、その恩徳をお書きになっているものとして、ありがたく受けとめるご本ということになっていらっしゃると思うのですが、私のように歴史のほうからこの本を見ますと、これはある意味においては武士道外伝になっているのでございます。

ページ数や枚数でこそ四十八巻にわたるこの法然上人御伝の中で、一番多いというには言い

かねるかと思いますが、しかし、一番大切なところ、たとえば蓮生房熊谷次郎直実などの信仰に触れるところでは、一卷全編が熊谷伝になっているのでございます。しかも、それは蓮生房としての熊谷が、どういうふうになら様との出会いを大切にし、そこで受けた感動をどのように深めていって、熊谷という人の武士道を武士道さながらに信仰に深めていったかということについての、まことに感銘深い記録になっているのでございます。そして、こういった形のもものが少なくとも五、六巻以上にわたるのでございます。

私は、こういう点から、武士道の歴史を系統的に年代を追って尋ねる仕事をやっている過程で、これは武士道というものを哲学的に、宗教的に、世界観として最も深めた記録の一つとい

うふうに読ませていただくようになったのでございます。現在もそうなのでございます。

そして、歴史家の、武士道を論ずる人たちの間で、この本をどのように深い武士道の、言ってみれば根本経典の一つというあたりまで深めて考えるような考え方がないところに、武士道の研究というものがやや底の浅い空回りするような議論になっている理由も一つあるのではないかと思います。そこでも、思ひかというふうに思うのです。そこでまず、思想史とか精神史とかいうものとして武士道を研究する人たちの間において、この法然上人御伝を、すなわち行状画図というものを、もっともつと真剣に読むということの必要性を痛感し、それを私の本の中でも強調する一章をまとめさせていただいているのでございます。

そこから今度は逆に、先生方、皆さん、すな

わち浄土門にかかわる方々へのお願いがあるの
でございます。おそらく先生方が最終的に目標
とされているところは、法然様がお説きになつ
た浄土宗というものの念仏の心を、どういふ
うにして念仏がよくわからない人たちにお伝え
していくかということだと思ひます。できれば、
それが觀念の念仏にとどまっていなくて、本當
にその人の全存在そのものを信仰に深めていく
ようなところまでこの教えを広めていく、深め
た理解をしていただくように説き進めていくこ
と。それがおそらく先生方の最後の目標になる
ものだろうと私は思っているのでございます。
もしそうであれば、法然上人様が、最も信仰か
ら遠い、最も学問から遠いところにいる人たち
に対して、どれだけ感銘深く念仏の行というも
のを教えたか、その教えを受けた人たちがどの

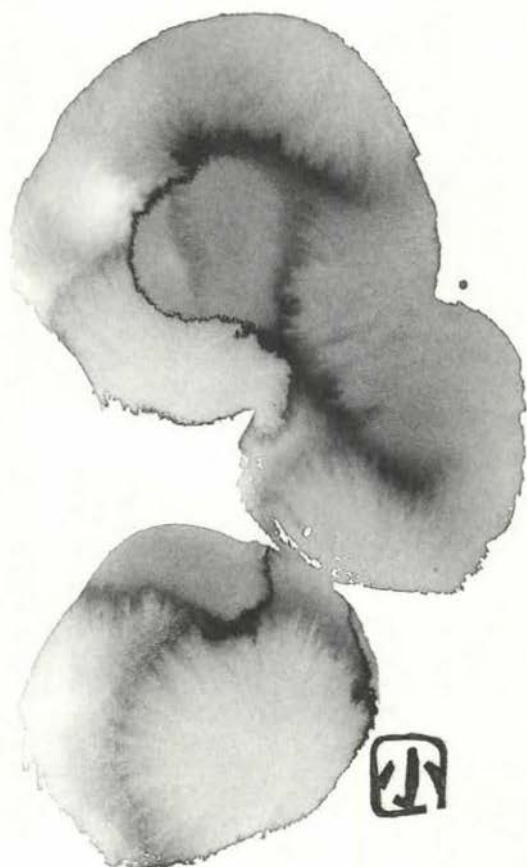
ように忠実にその教えを終生守って変わることもなく、立派に極樂往生を遂げるに至ったかというところを見届けて、これを顕彰すること以上に大切なことはないはずです。そのような記録として、私はこの『法然上人行状画図』以上の歴史記録はないと思っていますので、ごまします。

これが、私が歴史記録という理由でございませう。信仰ですから、確かに秀吉が何年何月何日にどこで戦いをしたとか、そのとき奪い取った領地は何十町で、殺した敵の首はいくつだったとか、そういう意味での一から十までの正確さというものは、この心の真実の記録にはございせん。しかし、私がこの『法然上人行状画図』というものを読ませていただいてまことに感銘を深かったのは、内容もさることながら、この

くらいに感銘深い物語で、まず奇跡にしかならないようなことを、この本のように一々出典を明らかにして、しかも、そのよりどころにする史料について、我々の今日の目からしても、十分に歴史的な史料として評価することのできるようなものだけに絞って構成されていることと、ございませう。これは歴史記録としても合格です。

その次でございませう。大抵こういう形をとりますと、正確で事実に近いからかもしれないが、せんが、どうも読んでもおもしろくないというのが通り相場です。記述は確かだけれども、細かい事実を並べたって感銘も感動も感激もどこからも出てこない。そういうものがまず歴史家の書いた歴史記録というものの評価になっているのでございませう。

ところが、この『法然上人行状画図』は違ひ



ます。可能な限り確かな史料に基づいて書きながら、しかもこのくらいに感銘深く、これだけ文章として朗々唱することのできるような名文にしているというのも、たぐいまれなことでございます。親鸞についても道元についても日蓮についても、この方々がお書きになったもの、書き残されたもの、それから古い伝記、そういったものは、商売柄ひと当たり勉強させていたでいます。そうよくはわかりませんが、大体どの程度かということぐらいは見当つきます。確かであって、これほど感銘深くて、そしてこれほど深い真実をわかりやすく説いて、文学にもなっておって、しかも十分に宗教上の説教にもなっている、そういうものはそう減多にありません。数多い祖師伝の中でも最高のできのものの一つだと思っているのでございます。

そういうことを私は皆さん方に、このような席上で歴史をやっている者の責任において、まず確認しておきたいと思います。そして、こういう本をもう少し大事にしていただきたいと思うのでございます。『選択集(選択本願念仏集)』であるとか「一枚起請文」であるとか、それぞれに大事なものでございます。私もすばらしいものと思うのですが、残念ながら、言ってみれば硬い真理というものとして書かれているものでございます。具体的に血肉の通った人と人の間のやりとりではありません。法然様の言葉がどう受けとめられ、どういう感銘の中でその言葉が生きたか、そういうことはそこでは語られていないのでございます。したがって、極端にいえば、これは先生方のようにある程度理性というもので、学問というもので受け取るこ

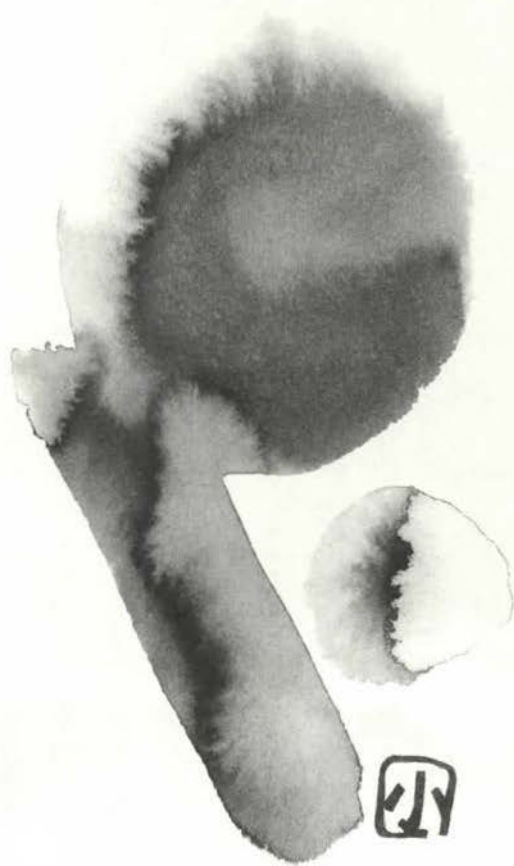
とのできる人にとっては、これは最高の感動になり得ます。ですから、みなさんのような方の間ではこれ以上の文章はないということはもつともと思います。その通りだと思います。しかし、そこに安住しておられては宗教にならないのではないかというのが、私も同じように信仰を求めている感想なのでございます。なぜなら、宗教が本当に必要なのは文字が読めない人たち、読めても難しいことのわからない人たちだからです。言葉としてはわかって、それを自分のものにしようとしなない人たちだからです。そういう人たちに対して、この尊い深い意味を持った世界をどう伝えていくか、どうわかっていただき、それを生活の血や肉にしていけるか。そこまでおろしていかないと、これは本当の意味で仏様の言葉にはならないのでございます。

法然様という方、これは親鸞様も同じでしようけれども、この方々は学問のわかる人たちに真理を教えようとなさったのではないのでございます。「一枚起請文」にもはつきりそのようにお書きになっておられるのです。本当の念仏の心のわかる人たちは、たとえ一代の難しい学問をしてよくわかったとしても、一文不知の輩と同じように難しいことは何も知らない者のようにして、ただ念仏のありがたさだけを唱えるもの、教える者、そういう者でなければならぬ。そういうふうな「一枚起請文」というのは結ばれているのでございます。

そうであれば、法然様に本当に連なる人は、どんなに学問があっても一切学問がないようにして一文不知の輩にも仏様の心や法然様のことばが伝わるようにすることが、往生の門をくぐ

らせる手引きとして望まれるのです。それが最も法然様にふさわしい念仏行になるはずでございます。

法然様が自らそのことを実践されている記録



が、この『法然上人行状画図』でございます。

たしかに、天台のある僧侶の疑問に対してこう答えたとか、あるいは、修行している僧侶の疑問に対してこう答えたというのも尊いに違い

ありません。しかし、その尊いお言葉でも、難しい漢字で書いたのではまったくわかりません。

人殺しをしても平気である、乱暴しても悪いと思わない、そういう人たちに対して、諄々^{じゆんじゆん}とそういったことでは人にならないのだと教え諭して、自然に仏様への深い信心が念仏一行に帰入していくのです。法然法語はその心が即座にわかって、そのまま信者に導くように話しかけるのです。そういう専修念仏一行道がもし記録されているとすれば、その言葉、その文章こそは、念仏行者法然のハイライトというべきです。

ここで、無知、一文不知とは、ずばり鎌倉武士のことです。

『法然上人行状画図』に登場する鎌倉武士というのは、まったく学のガの字もない人たちばかりです。そういう人たちだけが法然様から板東

の阿弥陀仏と言われるような、最高の評価を受ける無二の信者になったという記録がこれです。そういう極め付きの信仰についてだけの記事が、この『法然上人行状画図』に出てくる鎌倉武士たちの信仰記録なのでございます。

ですから、巻数が一番多いということでも、また、法然様の一番深い哲学とか理論とかが表されているということではないにしても、ここにはある意味で最も法然様らしい心が表され、法然様らしい信仰の成果が、最高に花開いた記録がここにあると言えると思います。この武士道物語における法然様というのが、おそらく法然様の徳を讃えるにふさわしい箇所になるのではないかと、私は思っているのでございます。

(つづく)

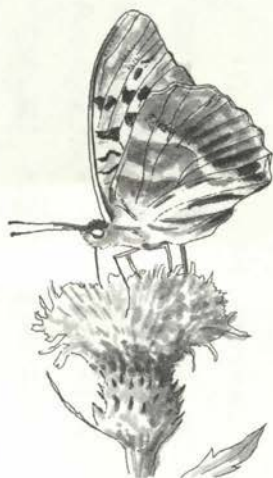
(東北大学名誉教授・盛岡大学学長)

午後の日差しの中で

〈第三回〉

めぐり会い(三)

吉川英明



麵(2)

讃岐の人のうどん好きには驚嘆したが、麵類が好きなことでは、私も引けは取らない。好きが高じて、馬鹿な失敗もしたりする。

もう五、六年前の夏のことだった。土曜日の午前中東京の家を出て、軽井沢に着いたのは正午を大分回っていた。

町に近づくにつれ、私は目を皿のようにして

道の両側を見回した。碓氷バイパスを上つてくる途中、路肩に大きな看板が立っていて、「東京荻窪、らーめんの××屋、軽井沢店オープン」と、大書してあるのを見たからである。

荻窪の××屋といえば、ラーメンでは有名な店だ。雑誌の特集の「おいしいラーメン百店」とか、「東京食べ歩き」などという類の本には必ず名前の上がる名店なのだ。

その手の雑誌やガイドブックには時折目を通して、こればと思う蕎麦屋やラーメン屋が見つければ電車に乗っても試食に行く私なのだが、荻窪はやはり、ラーメン一杯だけで往復するには、ちょっと遠すぎた。××屋のラーメンは、私にとって、まさに垂涎のラーメンだったのである。

(××屋のラーメンが食える)

そう思っただけで、朝食抜きで走ってきた私の空腹はいや増した。

町のどこにあるのか、看板の表示を見落としてしまったが、通り過ぎる瞬間「旧道、教会」という字を見た気がした。

角を曲がってスピードを落とす。

あった……道路の左側に「××屋」という看板が見えた。

慌てて近くに車を停め、店に入った。心配していたとおり、かなり広い店内のテーブルは満席だった。

「申し訳ありません。少しお待ち願えますか。すぐに空きます」

ラーメン屋にはそぐわない、黒服の男が近づいてきて頭を下げる。

気がつくと、私の他にも先客が四、五人、入

り口脇の壁際に立っている。普通だったら、またにしようと、そのまま出てしまうとところなのだが、店内に立ち込めている、えも言われぬ香りの呪縛に足が動かない。

見回すと、右の隅の方の一人は、もう既にスープの最後の啜りにかかっている。それほど待たずに済みそうだ。

（早く立たねえかなあ）

と、苛つく一方、

（あんなに最後までスープを飲み干しているところを見ると、よっぽどうまいのかもしれないな）

などと、湧いてくる唾をしきりに呑み込んでいたりした。

そのうち、壁の品書きの上をさまよっていた

私の視線が、値段の上に貼り着いた。『ラーメン千円』『チャーシューメン千七百円』と書いてある。

ラーメンガイドによれば、荻窪の店では、たしかラーメンが六百円か六百五十円だったはずである。いくら何でも千円は高すぎる。

（軽井沢だと思って……）

カチンと頭に響いたが、店を出る気など毛頭ない。この際、大抵のことには目をつぶれる。

だが、やっと席が空いて、注文をする時に、二度目のカチンが来た。

何しろこっちは極度の空腹なのだ。餃子も欲しいと言ったら、ありませんと言う。

「じゃ、ラーメンの大盛りでいいや。」

「すいません、大盛りはやっておりません。」

「じゃ、しょうがない。ライスつけてよ。」

「申し訳ありません。ライスもございません。」

あの、チャーシューメンでしたら、お肉がたくさんのもつていて、おなかにもたまると思います
が……。」

バカヤロー、千七百円のチャーシューメンなんか食えるか……言葉にまでは出さずとも、普段ならここで席を立ててしまうのだが、これぐつと堪えた。

「いや、ラーメンでいい。」

せいぜい凄味を利かせたつもりで、低くそう言っ
て腕を組んだ。

「かしこまりました。ラーメンでございますね。」

黒服は、物腰までもラーメン屋にそぐわず、いやに慇懃だ。こうなると、その慇懃さもちよつと気に障る。

見回すと、真夏の軽井沢、一人でラーメンなんか食おうというのは、私ぐらいのものである。周りは、若いカップルやグループ、それに家族連れで、どの顔もこの上なく楽しそうだ。

ラーメンが千円しようが、大盛りや餃子がかろうが、そんなことで臍を曲げている顔などどこにも見えない。

あまり仏頂面しているのも大人げないかと、私の機嫌もだんだん直ってきた。

何しろ、ラーメンの顔がいい。

一度に、十杯近くあがるらしく、

「ごめんなさい、熱いですよ……気をつけて」と、テーブルの間を縫って運ばれていく井を伸び上がって盗み見ると、これ、まことにうまそうなのだ。

薄い醬油色のたっぷりとしたスープの上に、

透き通った熱そうな油が厚めに浮いていて、井が揺れる度に、中細の腰の強そうな麵が見え隠れしている。メンマと、チャーシューに薬味の葱だけというさっぱりと潔い具も私の好みだった。

ところが……待てど暮らせど、私の分が来ない。時計を見ると、そろそろ一時に近い。私は、一時に人に会う用事があるのだ。さっきの黒服を呼び止めてその旨を告げ、まだ時間がかかるようなら、もういらないと通告した。この時すでに、私の胸中はただならぬ状況にあったのだ。「お待たせして、申し訳ありません……この、次の回であがります。」

それでも、厨房から帰って来た黒服のその言葉に、ごくりと唾を吞んで、浮かしかけた腰を

落ち着けたのだから私も意地が汚い。

「ごめんなさい……熱いですよう。」

間もなく、例の声と共に、三人の店員が手分けして熱々のやつを運んできた。

初めの二杯は、私の相席のカップルの前に納まった。強烈な芳香が鼻をつく。だが、その二人は、私より後から座ったはずなのだ。

次の四つは隣のテーブルに、そして三人目の店員は、並々とスーパの入った井がずらりと並んだ盆を、巧みに操って私の横を素通りすると、入り口脇の大テーブル目指して進んで行った。振り返ったが、もう後は来ない。

ついに堪忍袋の緒が切れた。

黙って、しかし、音を立てて立ち上がると、私は決然と出口に向かった。



「あつ、お客様……えつ、出ませんでした？」

レジで、黒服が慌てて目を剝く。

黙って出て来ようと思ったのだが、そう声をかけられたとたん、抑えていた怒りが噴き出した。

「出てくりや帰りやしないよ、馬鹿野郎。俺には時間があるんだって、さっき言っただろう。出ます出ますって出鱈目言いやがって……出来ねえなら出来ませんってばかり言やあ、誰もこんな汚え店にいつまでも座っちゃいねえや。馬鹿野郎。」

一旦かつと来ると、ひどく口汚なくなるのが私の数多い欠点の一つである。最後に、おまけの馬鹿野郎を一声浴びせて、足音荒く店を飛び出した。

あまりの腹立ちに、もう空腹も感じない。

だが、これから会う相手に、怒りで青くなった顔を見せてもいけないと、歩度を緩めて深呼吸するほどの分別はまだ残っていた。

用事は、三十分ほどで済んだ。

一人になって落ち着いてみると、再び激しい空腹感が襲ってきた。さっきのラーメンの香りと色を思い出すと、いても立ってもいられない。しかし、私も男である。店長らしき男をあれほど怒鳴ってしまった後で、おめおめと戻れない。だけど食べたい。どうしよう……散々悩んだ末、一計を案じた。

車のトランクから、ボストンバッグを取り出し、シャツを替え、ズボンもジーンズに履き替えると、サングラスをかけた。変装したのであ

る。

時間はもう二時近い。戻ってみると、嬉しいことに空いている。

だが、それからがいけなかった。

「あ、先程のお客様……。」

店に一步踏み込んだ瞬間、レジから黒服が飛び出してきた。さすがは黒服、プロである。あつけなく見破られてしまったのだ。

「先程は大変失礼しました。何しろ開店したてで、馴れない者が多いものですから……。」

いとも丁重に謝られて、すっかりばつが悪くなった。

「いやいや、こつちもねえ、急いでたもんだから、ついつい怒鳴っちゃって……いや、悪かった、悪かった。」

そう謝ったものの、何のために服を着替えて

サングラスなんかかけているのか、それを覚られるのが怖くて、さっさとテーブルに座り込んだ。

「ラーメン一丁……急いでだよ、急いで。」

黒服が奥に怒鳴ると、あつという間に、あのラーメンが目の前に出てきた。

紆余曲折を経ただけに、感激も一入だ。

味は……最初、麺を口に入れた時、ぷんとくる煮干しのような臭いが私の好みでないなと思ったが、次第に引き込まれ、食べ終わって、ああ良かったと肯いた。やけどするほど熱いのも気に入った。

翌年の夏、黒服はもう私の顔を覚えていなかった。以来、荻窪との値段の格差を忌々しく思いながらも、毎年必ず一度は寄っている。

(作家)

「死」に立ち向かう

稲葉小太郎



いなば・こたろう ●一九六一年神奈川県生まれ。東京大学文学部印度哲学印
度文学専修課程卒。祖父は福井県の日蓮宗妙海寺住職だった。著書に現代日
本の宗教事情を描いた『コンビニエンス・マインド』（大蔵出版刊）がある。

仏教が解決すべき最も重大な問題はなにか。
などと大上段に構えるのは好きではないが、こ
の際だからじっと考えてみる。頭のなかにはあ
れも苦しいこれも苦しいと、いろんなテーマが
浮かんでくるけれど、最終的にたどり着くのは
死の問題だ。やっぱり、ぼくたちが仏教に期待
するのは、死の恐怖を消してくれることなのだ。

せっかく生まれてきたのに、なぜ死ななけれ
ばいけないのだろう。死ぬときはどんな苦痛が
待っているのか。死んだあとはどうなるのか。考
えだすと、どんどんコワイほうへ行ってしまう。
このところ死についてあれこれ議論するのが
一種のブームのようになっていて、『完全自殺
マニュアル』という本が何十万部も売れている

らしいし、NHKが放映した「チベットの死者の書」も話題になっている。

そんななかで、どうも日本の仏教からの正面切った回答というのが、はっきりと出ていないような気がする。確かに、「仏教では、死後はこうなる」といっています」という発言は聞くが、どうもぼくたちにはピンとこない。現代の感性とあまりにもかけ離れているからだ。死の問題はどんどん複雑になってきている。医療、人権などさまざまな現代的な問題を踏まえつつ論じてくれないと、現場の要請には答えられないのではないか。

こうした死をめぐる問題に、まさに体当たりで立ち向かっているのが中野東禅さんだ。京都市にある曹洞宗龍宝寺の住職なのだが、寺にはもう五年も帰っていない。東京で駒沢大学と曹洞宗教化研修所で教えるかたわら、「死の臨床

研究会」「医療と宗教を考える会」の世話人を勤める。脳死・臓器移植、ホスピス、死の準備教育の問題について最先端の医療や法律問題、人権問題を踏まえたうえで、仏教者の立場から発言をしている。

いかにも人当たりの柔らかい、優しい印象のお坊さんだが、いったん死のテーマで論じはじめると時間がいくらあっても足りないという、情熱的な部分も併せ持っている。

死との出会い

中野東禅（幼名・荒見勝也）さんは一九三九（昭和十四）年、静岡県に生まれた。実家は養福寺という山村の曹洞宗の寺だったが、三歳で母を、六歳で父を亡くし、貧困のなかで兄弟も離れ離れになってしまった。

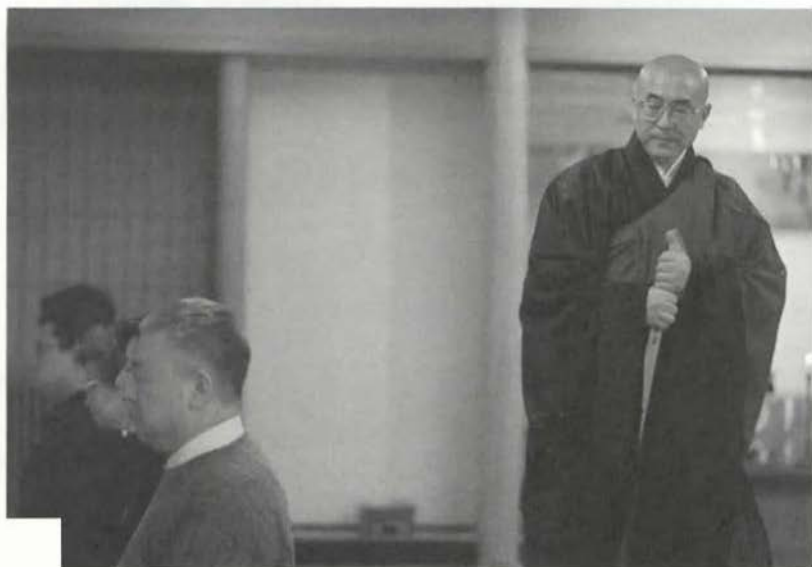


月2回の坐禅指導は般若心経を読むことから始まる。

養母と暮らしていた中野さんは、小学生のころから法事や葬式にひとりで行って出掛けていた。村の誰かが死ぬと、夜になって使者が迎えに来る。藁葺の農家の納戸には、死体のごろりと寝ている。顔にはハンカチも被せていない。蠟燭の明かりのなかで、死体とふたりっきりの状態で、お経を読まなければならない。帰りは明かりひとつない夜道をひとり帰る。

「今思えば、小学生にとっては負担でしたね」
葬式が終わった次の日は骨揚げがある。登校前の朝の七時ころ、川原の焼き場にひとりで行くと焼けた骨がくすぶっている。最後まで焼けるのが頭蓋骨。中野さんは半透明のピンク色に光る、まだ熱を持っている頭蓋骨を見つめながら、

「あ、お骨ってこんなにきれいなものか」
と思ったという。最近ではほとんどの遺体が焼



僧が壁に向かい坐禅を組み静寂がおとずれる。

却釜で処理されるから、お坊さんでもこんな光景を見たことのあるひとは少ないのではないだろうか。

「そのとき考えたのは、死骸なんて怖いことはなんにもないということ。一番怖いのは生きている人間だなあ、と」

両親の相次ぐ死と兄弟との離散、さらに幼いころから身近に死と接した体験。このような体験が、のちに死の問題に取り組む下地になっているのかもしれない。

十六歳のとき永平寺に赴き、八カ月の修行のあと、説教師として有名だった中野東英さんの孫弟子となる。中野東英さんはユニークな経歴の持ち主。貧困のため曹洞宗大学（現在の駒沢大学）を中退し、尺八を吹いたりして暮らしていたが、のちに説教師として目覚めた。テニスや手品、歌舞伎鑑賞など趣味が豊富で、中野さ



東禪師自らも坐禅を組む。

んの言葉でいえば「貧乏なくせに遊び人」だったという。お気づきのとおり、中野東禅という名前はこの中野東英さんと、永平寺で長く住職を務めた熊沢泰禅さんの名前から付けられた。

師匠から学費を出してもらった中野さんは駒沢高校、駒沢大学と弁論部で活躍（弁論部へ入

る条件は、政治活動をしていないこと、だったという）。ちょうどそのころ名古屋で安楽死裁判というのがあり、大変なショックを受けた。脳溢血で倒れた父親を、息子が毒を盛って殺してしまった事件だった。一九六二年、名古屋高等裁判所で出された判決は、懲役一年執行猶予三年。

「殺してほしい、と求める父親の、苦しみを少しでも軽くしてあげたいという家族の気持ちはわかる。しかし、だからといって、人を殺すことは絶対に許されないはずだ」

この問題に仏教はどう答えるのだろうか。考へ、悩み、弁論のテーマに安楽死の問題を取り上げるようになった。他の学生たちの議論といえば政治や法律のことばかりだったのに、あくまで人間論に固執した中野さんは、異色の存在だった。

衆生の悩みと教学を 媒介するもの

大学卒業後は修士課程まで修了し、研究室に残って布教活動の研究を続けた。

そのころ(株)ミットヨの沼田惠範さんが始めた仏教伝道協会の「実践布教研究会」において、宗派を超えた交流が生まれつつあった。中野さんはその第一回の集まりから参加する。何百人という他宗の僧侶と交わり、念仏や題目修行など曹洞宗にはない修行にも積極的に加わった。

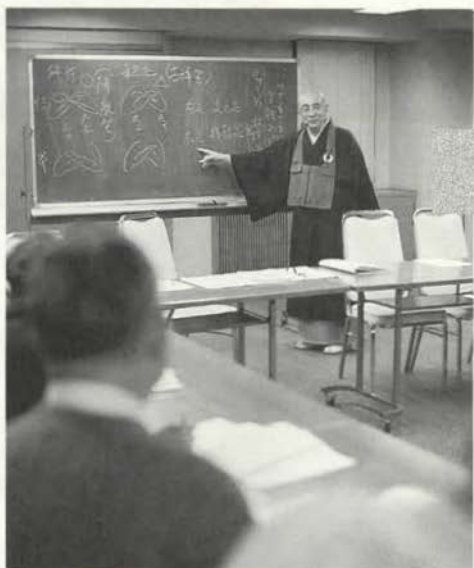
「教団の中に閉じこもってはいはわからなかった近代の仏教伝道の流れを知り、目が開けた 생각이었습니다ね」

「実践布教研究会」では十五年に渡って代表幹事を努めることになる。

その後、七十年代になって急激に医療が進歩

し、さまざまな新しい問題が噴出してきた。過剰医療の問題もそのひとつ。無理に延命するのではなく、自然に死にたいという欲求が生まれ、尊厳死という言葉が注目された。学生時代に熱弁をふるった安楽死裁判のことがここに蘇った。中野さんはそのころから大阪の淀川キリスト教病院に本部を置く「死の臨床研究会」に加わり、医療の現場では何が必要とされているのか、みんなが仏教に何を期待しているのかを目の当たりにする。十年ほど前から始めた「医療と宗教を考える会」では、各界の専門家を招いて九十回以上も勉強会を開いている。

そうして「日本印度学仏教学会」の生命倫理委員会に所属して、仏教学者による「生命問題」のアンケート調査の立案・まとめに参加。昨年、アンケート結果をまとめ、六十ページに及ぶ「生命倫理に対する仏教学の答え」を「印度学佛教



講義は『正法眼蔵』の坐禅儀、坐禅箴。

学研究」に発表した。個人的には『上手な死に方』を毎日新聞社から上梓、東洋と西洋のさまざまな事例をもとに、死に関する最先端の問題をやさしく説いた。

その第四章「脳死・安楽死と仏教の智慧」の中で、臓器移植について中野さんはこのように書く。
「仏教では『三輪空寂』『三輪清浄』という考

え方があります。三輪というのは、施す者と、そこにやりとりされるものと、それから受け取る側、この三つにそれぞれ執着がない、空であるということ。そうしますと、自覚ある者においてこそ臓器移植が行なわれるべきである、つまり臓器を差し上げるほうも、もらうほうも、それからこれにかかわる医療関係者も家族も、自覚とよろこび、空、あるいは信頼などが実現しているときでなければ行なつてはいけません」とになります。

「臓器の提供は、基本的には病む人への痛みを原動力とすることはたしかです。そのうえで、迷いと煩惱を再生（輪廻）させることなく（空・解脱）、慈悲の純粋性を実現維持するシステムが必要で」

もちろんこれですべてが解決とはいかないだろうけど、仏教の立場からこのように指針を示

してもらうと、ほっとする気がするのである。

仏教雑誌「ナーム」の編集長である前田利勝さんは中野さんを評して、

「今では曹洞宗で、いや、日本仏教界で、人間の死をめぐる現実的な問題にもっともくわしいひとり」

という。

ここで、ひとつ疑問に思うのは、死の問題について語るのなら、それこそ仏典のなかには語りつくせないほどの材料があるはずだ。なぜあえて畑違いの医療や法律の分野に踏みだしていくのか。医者たちから門外漢として排除されることだってあるだろうし、逆に宗門内部から反発される可能性だってある。仏教者にとって、大変な冒険であるはずだ。

「私の専門は説教です。説教法を通した布教理論を研究している学問です。その説教の場

何を語るのか。確かに根本には仏教の原則が必要ですが、それだけでひとりひとりの聴衆の悩みに答えられるのかどうか……」

衆生の悩みと教学をドッキングさせる「媒介物質」が必要だ。それこそが、脳死やホスピスなど現代の最先端の問題なのだという。こうした問題というのは、いくら考えても理屈では解けない矛盾した状態で生まれてくる。たとえば今、現に救われたという患者がいる、しかし、他人の臓器をもらってまで生きるのが正しいのかどうか。あるいは、殺人を犯した人間は、死刑になってもしょうがないのか。

こうした時代の先っぽに、最も根源的な問題が現れてくる。

「そこをつきつめていくことによって、逆に、仏教が明らかになるんです」

中野さんは自信を持って、いい切る。

世の中をわかりたいという衝動

中野さんは月に二回、南無の会で座禪指導をしている。まったくの無料奉仕である。姿勢を調べ、呼吸を調べ、こころを調える方法を、初心者にもわかりやすい言葉で順序立てて教えてくれる。警察は用いない。

「中野先生は、優しいから」

と参加者のひとりという。確かに中野さんはいかにも温和そうな外見の持ち主。話し方も噛んで含めるような優しさに満ちている。が、かつての教え子が今の中野さんを見て、はて、と首を傾げることがあるらしい。それというのも、かつての中野さんの説教の授業は大変峻烈なもので、泣かされた生徒も多いというのだ。その内に秘めたエネルギーの源はどこにあるのだろうか。

もうひとつ中野さんを見ていて印象深いのは、いつもパンパンに膨らんだ鞆を持っていること。決して大きくないからだて重そうな鞆を持つ姿はユーモラスにも見えるが、内面の厳しさも伺わせる。鞆の中は論文や資料がぎっしりつまっている。取材や対談などをお願いしても、こちらが申し訳なく思うほど準備してきてくれる。聞けば、自宅は本でいっぱい。トラック一台分の本を捨てて、段ボール五十箱分をひとに譲り、トランクルームに四十箱預けているうえに、二部屋が本で埋まり廊下にまで溢れだしているという。

なぜここまで勉強するのだろうか。実は中野さんは教育者の家系だ。父も母も兄弟も教員だった。父は仏教学を学んだ人ではないと思っていたのに、死後三十年も経って分ったことは、昭和初年から出版された『国訳一切経』と『国

訳大蔵經』をひそかに買いためていたという。

教育者なら勉強熱心なのもわかる。でもそれにしても、なぜ？ と問いを重ねると、

「はつきりいって、自分のためなんです」

と答え、こんなエピソードを話してくれた。

終戦後の貧しさのなかで、中野さんは当時三千円だった高校の入学金が払えずに一カ月ほどで中退し、町の新聞社の印刷見習い工として就職する。

「その仕事面白くてね。朝の八時から夜の八時まで働いて日当が百円の、今から考えるとんでもない職場だったけど、インクだらけになって働きました。小さな会社だったから、当時の活版印刷の技術はほとんど覚えちゃったね」

ところが二年ほどした一九五四年のある日、その新聞が突然、発行停止になった。ビキニ環礁における水爆実験の放射能を浴びた第五福電

丸が焼津港に帰ってきて町は大混乱になり、とても新聞を出すどころではなかったのだ。

「そのとき私は、一体何が起ったのか、わからなかったんです。回りは大騒ぎしているのに、新聞を読んでも書いてあることがわからない。水爆って何なのか、さっぱり理解できないんです」

水爆って一体ナンナンダ？ そんなものを作る人間ってナンナンダ？ オレは一体ナンナンダ？

目の前が真っ暗になる衝撃だった。そのとき、世の中がわかる人間になりたい、という願いが生まれた。

では、世の中がわかるためにはどうしたらいいのか。そうだ、お坊さんになればいい。そう思いついたら居ても立ってもいられない。悶々とした日を半年ほど過ごして、辞表を出して故郷に帰ってしまった。

そのころ寺に戻って僧籍を継いでいた次兄が、怒ること怒ること。「こんな貧乏はオレだけでたくさんだ」といって殴られてしまった。それでも寺の保育園を手伝いながら半年ほど過ごしたころ、ふと机の上を見ると永平寺で修行するための申請書が置いてある。兄は、貧乏のどん底にしながら、衣や身の回りのものを準備してくれていたのだ。中野さんは、永平寺へ向かった。

この、大好きだった仕事を辞めて仏教の道へ入った過程は、中野さんにとって精神的な意味での死の体験だったのではないか。

自分がわからないということの自覚。わかる人間になりたいという発心。そして努力。

そうした内面から突き上げるものと現実社会における活動とがひとつにつながっているからこそ、中野さんの発言は心に触れてくる。膨大な資料を綿密に読み込んでいくことから導きだ

された論理的な結論だったとしても、単なる議論のための議論に終わらない、人間的な温かさを保っている。

京都の寺にはもう五年も帰っていない、と最初に書いた。葬式も、寄付を集めるのも苦手だという。

「こんなこと罰当たりだと思うけど、時間があったくない。イライラしてしまうんです」

中野さんの一日は、ほとんどが資料を調べたり、原稿を書くことで過ぎていく。仏教者として珍しいタイプかもしれない。

「自分が知りたいから、納得したいから調べるんです。仏教は解決学、救いの学。精神の問題を解決するためには、とことん調べないと」

ただ、この発言は文字通り受け取るわけにはいかない。自分のため、といいつつ、こんな発言がポロリとこぼれる。

「自分がわからない問題は、ひととわからないと思う」

中野さんの、優しさの内に秘めた厳しさのさ
らに奥には、もうひとつの優しさがあるのだ。

これから力を入れたいのは「死からの学び」、



坐禅と講義を終え、帰途に着く。

いわゆるデス・エデュケーションだ。大正大学
や駒沢大学の授業では「別れの手紙」を一クラ
ス百人以上の学生に書かせた。自分が不治の病
に罹って余命いくばくもないという設定のもと、
自分の一番大事なひとに向けて手紙を書かせた
のだ。学生からは、「書きながら涙が出てしま
うがなかった」「こんなに厳しい授業は初めて
だ」という声があった。

しかし、二十歳前の学生が、こういう形で自
分を問われるという経験は、無駄になることは
絶対にはないと思う。中野さんのほうも、この課
題を自分の精神的な死の体験と重ね合わせてい
るのではないか。

そういえば、中野さんからこんなセリフを教
えてもらったことがある。

「死ぬ前に死んでおけ。そうじゃないと死ぬと
きに、ほんとうに殺される」

“残る桜”と “散る桜”

加藤ひろむ

“死”を考えることは“いのち”を考えることであり、それはまた“生きる”ことを考えることでもある。それがテーマだと言われてすぐ頭に浮かんだのは、五十年前のあの戦争の時代のことだった。

当時、私は広島市の南約十キロ、瀬戸内海に浮かぶ島にあった軍の学校で、訓練に明け暮れていた。そこでは「死ぬことが生きることか」と、毎日の生活の中で考えさせられていた。「不珍惜身命」は当時の若者たちが懂れた人の座右



写真 西海寺尚丸

の銘であつたし、江戸時代に九州は佐賀・鍋島藩で武士の心得を書いた『葉隠』という本に、

「武士道とは死ぬことと見つけたり」という有名な文章があつた。『鍋島論語』と言われたそんな本や吉田松陰が書いた『講孟余話』などを

教官から勧められて読んだり、軍歌演習の時間には「軍人たるの自分は、心は忠に、気は勇み、義は山よりもなお重く、死をば軽しと覚悟せよ」と大きな声で歌っていた。「貴様と俺とは同期の桜」の歌は小学生でも歌っていたし、「散る桜 残る桜も 散る桜」は、戦地へ発つ先輩たちや出撃する特攻隊員を送る合言葉となつていて、残された我々もやがては「散る桜」と思ひ定めていた。

思えば、子供のころからそう教育されていたし、中学校には陸軍の将校が配属されていて、登下校時はゲートル巻きで軍事教練もあつたか

ら、当時の若者はみな軍国少年になっていた。

日本は「神の国」であり、天皇のため、国のために命を投げ出すのは名誉であり、義務である、誰も疑いをはさまず、信じ込んでいた。

当時、兵隊は一錢五厘で出来るが、軍馬は違ふという言い方もされていた。召集令状一枚で兵隊は動員すればいいが、馬はそうはいかないと言うのだから、人間の命がどれほど軽くみられていたか。しかもそれが通用していたのが、あの時代だったのである。

戦いに敗れ、天皇は神ではなく、人間であると宣言され、すべてが一変した。信じていたものが根底からくつがえされたのだから、文字通り茫然自失。復員して家に帰っても、頭の中はからっぽになつていて、何も手につかない。二階に上がり寝ころがって、ただ天井を見つめ、

出るのは溜め息ばかりという状態が続いて、これではダメだと動き始めるまでにどれだけの日数が必要であつたか。

そうして五十年……。

「散る桜 残る桜も 散る桜」……あの頃、戦地に赴く先輩たちを送った言葉が、良寛の辞世だつたと知つたのは、つい最近のことである。

「何故、あの良寛が……そんな気持ちからちよつとしたショックでさえあつた。手毬をついて子供たちと無心に遊ぶ良寛と軍国主義下で使われたあの言葉が、どうしても結びつかないたのである。

あれは昨年のたしか四月ころだつた。水上勉さんが良寛について講演されるというので、私は多摩まで出掛けたのであるが、水上さんは急

病で、栗田勇先生（駒沢女子大学教授・日本文化研究所所長）が同じ演題で講演された。話は非常におもしろかった。講演も終わりに近づき、良寛の死が迫つた頃の話になった。良寛の死は天保二年（一八三一）で、その辞世はと言え

形見とて 何か残さん 春は花

山ほととぎす 秋はもみじ葉

良寛は真言宗の家で育ち、曹洞宗の寺で修業して道元を深く敬慕し、晩年には浄土宗に傾斜していたというのだが、道元の辞世は……、

春は花 夏ほととぎす 秋は月

冬雪さえて すずしかりけり

また、良寛の心の奥底深くに刻み込まれてい

たろうという西行の辞世をみると……、

願わくば 花の下にて 春死なむ

その如月の 望月のころ

美しい自然の移ろい、自然と一体となって死にたいという願いが共通して感じられるが、良寛には他に越後の旧家にこんな文書が残されていたという。それは……、

良寛禪師重病の際、何の御心残りはこれなきかと人間いしに、死にとうなしと答う。また辞世はと人間いしに、

散る桜 残る桜も 散る桜

「死にとうなし」とはなんと天心爛漫、天衣無縫、形にとらわれない本音の感じが好ましいが、もう一つのその辞世「散る桜 残る桜も 散る桜」である。死んでいく自分と残っている

人。残されたその人たちも、やがては散っていく人たちのだと、散る桜に託した良寛の心はいかがであつたろうか。かの若き貞心尼との交流は、死の五年前から始まっていたのであるが……。

死に直面した特攻隊員や当時の若者が、強いられた自分の死を自らに納得させるために、宗教書などをむさぼり読んだろうことは想像できるし、当然であろう。綱島梁川やハルナツクを読みたくなった……などと、「きけわだつみのこえ」にも書かれている。散りぎわの良さが求められた当時の若者の心に、良寛のその辞世がびったり重なってもいたのだろう。だが、自分の死後、百何年かたって、自分の辞世がこと志と違い、あのような状態の中で使われるようになっていとは、泉下の良寛はどんな気持ちで眺めていたであろう。

良寛といえば、かつてこんなことがあった。

私は新聞社を退職後、仏教による青少年教化の団体で仕事をしていた頃、浄土宗のお坊さんで良寛を研究されている方を知り、何故良寛なのかと質問して困らせたことがあった。良寛の有名な「僧に非ず、俗に非ず」という言葉は、親鸞の『改邪鈔』にある言葉などとは当時知りもしない。非僧、非俗の典型である教信のように生きたいという良寛の願いに一遍や親鸞の姿がだぶってくる、と栗田先生は言い、良寛自身が念仏者として阿弥陀をたたえた歌も残っているそうで、かつての疑問もそうであつたかと改めて感じたものである。

さて、戦争なんだから、殺し、殺されるのはあたりまえというあの時代ではあつたが、そんな人ばかりではなかつた。たとえば……。

学徒出陣でいよいよ戦地へ出発するという時に、友人に対して「自分は敵と遭遇し、米軍兵士とあつても、銃口を空に向けて撃つ」と言つた人があつた。映画「ビルマの堅琴」のモデルともなつたその人は、わだつみ会の理事長中村克郎さんの兄・中村徳郎さんである。「今となつてはもう遅い。今頃こんなまで殺されるくらいならば、なぜもっとあの時、命がけて反対しておかなかつたか。もうローリング・ストーン（転落する石）だ」と言つた兄徳郎さん。「そんな人がいたから日本は戦争に負けたと言われるかも知れないが、彼の戦争に対する認識、人生観からそう言つたんであり、その言い残した言葉を生かし、今となつてはもう遅いなどと泣きごとを言わないように頑張らなければと思うのです」と中村克郎さんは言う。

広島に原爆が落とされた八月六日。あの日は

朝から雲一つない快晴だった。私たちはいつものように教室に入り、一時間目の授業が始まって間もなく、突然、窓ガラスに鋭い閃光が走った。すわ何事と思う間もなく、続いて凄い震動に襲われた。当時、学校の裏山の向こう側に火薬庫があったので、その火薬庫が爆発したかと思ったほど身近に感じられた、それほど強い震動だった。みな一斉に机の下にもぐりこんだ。続く震動はなかったので、窓から身を乗り出して外を見ると、あの巨大なキノコ雲がまるで生き者のように、なおモクモクと盛り上がり、どんどん大きくなっていくではないか。当然ながら、はじめて見る異様さ。中心部のオレンジ色が、なおも上へ、なおも横へと伸び上がり、広がっていく。その雲の下で、たとえようもないあの地獄絵図がくりひろげられていたことは、今

もなお多くの証言が繰り返しなされている。

私の妻の叔父は移動演劇の仕事をしていて、八月六日、広島で被爆した。隊員の女子五人はその場で即死、隊長だったその人は収容されていた宮島のお寺で、十六日に亡くなった。熱い熱いと言いながら、看病の人に隠れ、本堂横の井戸から水を汲み上げ、頭からかぶっていたそうだが、十五日の終戦を聞くと、「これから本当の芝居が出来る」と喜んでいたと言うのに……。新劇の団十郎と言われ、生きていたら戦後の新劇地図も変わったろうと言われたその人とは、移動演劇桜隊隊長・丸山定夫。四十四歳。さぞ、死にとうなかつたろう。

原爆による死者は、広島で十四万人。長崎で七万人。両市で被爆して被爆手帳を持ち、不安

な毎日を送っている人は、全国で三十八万人にのぼる。それであるにもかかわらず、世界各国が核実験を繰り返して、人体実験や死の灰を撒き散らして、その被害者はどんどん増えていく。

その実態を我々はどう考えたらいいのだろうか。

たとえばロシア。チェルノブイリの原発事故は八年前だが、現在も一帯は立ち入り禁止が続く、五百回以上の核実験が行なわれたセミパラチンスクでは、周辺に莫大な量の死の灰を撒き散らしながら住民にそれを知らせず、がん、白血病、腎臓・肝臓の機能障害、死産・流産の多発、新生児の死亡率が高く、異常出産も増え、住民をモルモット代わりにしたと、非難的となっている。

アメリカも例外ではない。核実験場ネバダ周辺で広がる核被害だけでなく、プルトニウム溶液などの放射性物質を人体に注射したり、核実験探知を目的に放射能を意図的に大気中に放出

する実験や、精神障害児に放射能の人体実験をしたことが明らかとなり、「ナチの実験を連想させる恥ずべき行為」と問題となっている。

太平洋のマーシャル諸島ビキニ環礁で、米国の水爆実験が行なわれてから四十年になるが、周辺島民は今も死の灰後遺症に悩まされており、今秋調査団が環礁東方のロンゲラップ島、ウトリック島を訪れようと現在募金運動中。

ベトナム戦争の枯れ葉剤被害も広がっている。ベトナムでは流産や異常児出産が多発し、従軍した米軍人や韓国軍人にも被害が広がっている、と最近のテレビが報じている。

あの戦争が終わって、五十年にもなるというのに、かつての日本軍の七三一部隊やドイツのナチ収容所と同じように、人体実験や死の灰、プルトニウムなどの悲劇になぜ苦しまなければならぬのだろう。所詮、力の論理が優先する

軍隊のある限り、こういう悲劇は無くならないのだろうか。宗教はその間にあって、どんな役割を果たすべきなのか。

終戦の昭和二十年八月当時、私は満十九歳と三ヶ月だった。最近出来た中学の同窓会機関誌の巻末に物故者名簿が掲載され、同級生二百名中約二割の名がそこに並んでいるが、その四分の一は戦死と書かれている。戦死の時は皆多分十八歳か十九歳であつたろう。どこでどんな様子で死んだろうかなどと、一人一人の顔を想像するとたまらなくなってくる。

今年の年賀状の中に「今年から来年へ私たち世代の正念場だと思います」というのがあった。戦争をいくらかでも知っている世代として、何をしなければならぬか。その人はそう問い

かけている。それがいま私たち世代に残された「生きる」道なのではないか、と問いかけられているようだった。

良寛が貞心尼に与えた戒語の中に、「物知り顔に言う」「よく知らぬことを憚りなく言う」「さとりくさき話」などと並んでいる。いささかそれにふれそうで、気おくれしなくてもないけれど、出来ることなら皆天寿をまっとうして死にたいだろう。強いられた不自然な死ではなく、「散る桜 残る桜も 散る桜」と自然の移ろいと一体となった死が迎えられたら……、と願わずにはいられない。少なくとも死の灰やブルトニウムの脅威は御免こうむりたい。残された人生はあまり長くはないけれど、そんな方向で生きられたらと、私はいま思っている。

(エッセイスト)



●最初からお詫びを記さなければなりません。新年号で、吉川英明氏と稲葉小太郎氏の文中、会話体のところで二文字落し、「」を取り払った形で印刷されました。これは原文とまったく違うものであり、そのため、文章がすっかり異質となり、執筆の両者に大変ご迷惑をおかけしてしまいました。申すまでもなく目て読む文章は、句読点はもとより、括弧のすべてにわたる書き手は細心の計算と注意を払いますから、出版する者もまた忠実にその意を体するものでなければなりません。調査しましたところ、これは初稿段階でのまったくのミスであり、しかも稲葉氏からはその点のご指摘があったにもかかわらず校了されたことはすべて編集チームの責任であります。ここに、誌上より改めて心からお詫びを申しあげます。

●高橋富雄氏の新連載が始まりました。講演収録をご許可の上で活字にしたものですが、その折の聴衆にも深い感銘を与えた内容ですので、ぜひ一読をおすすめしたいと思えます。また、何号か連載になりますので、これも楽しみにしていただきたいと存じます。

●巻末随想の加藤ひろむ氏は第二次大戦末期、広島島の原爆で散華された演劇さくら隊、丸山定夫氏とゆかりの方で、目下も演劇の世界に深いかかわりを持ちながら活動しておられます。「散るさくら、残るさくらも散るさくら」はそ

の大戦末期の若い特攻隊員らが好んで口にしたせりふでもありましたが、考えてみれば我々生きとし生ける者にとつては、すべてに当てはまる生命の真相をいい得た言葉ともいえましよう。いつかは迎える死の日まで、この限りある生をいとおしみ、悔いなくあらしめねばならぬと自戒いたします。

●今月の夏牧吾氏の「旅」の原稿は、当初二月十二日の昼すぎに新宿の某喫茶店で受けとる約束だったのですが、あいにく当日は二十四年ぶりの大雪となり、夏氏の足である小田急線がストップ。私は別の用事もあったため辛うじて出かけはしたものの結局は会えずじまい。しかし二日後、宅急便で届いた原稿に添えられた写真の中のマンサクにすっかり春を感じた次第でした。

●次号四月号は「浄土」新装一周年になります。九州の大本山善導寺法主・藤堂先生の玉稿も届いておりますので、どうぞご期待くださるようお願いいたします。

(編集チーム・小川有順)
編集スタッフ

栗田順一
齋藤晃道
細田芳光
大室照道
太田正孝
長谷川信潤
村田洋一
石上俊教

●お詫び

本誌二月号「仏教とエイズ」の記事中、A Y U S (仏教国際協力ネットワーク) をアークスと表記していますが、アークスの誤りでした。ここに訂正し、お詫びいたします。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受けつけております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた分には規定の稿料を進呈いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたら遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土

六十巻 三月号 価額五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成六年二月二十五日

発行 平成六年三月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社文化カラー印刷

写真機 文化フォトタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四七四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七



S★PPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリー-half〉



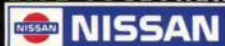
サッポロ生ビール カロリー-half

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を導く最大の要素は、その姿とかたちである。
つくし手の強い意志が感じられる姿と、それを企業に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO: セドリックV30 ツインカムターボ プロアム
VIP ●全長4800×全幅1745×全高1410(%)主
な装備 ●VG30DET(V6 ツインカムターボ・総排気量2960cc)エンジン ●最高出力255PS/6000rpm(※NET値) ●最大トルク35.0kgm/
3200rpm ●フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT)(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同等条件で測定したも
の。日産自動車株式会社お客様相談室 ●全国共通フリーダイヤル0120-315-232 ……………お近くのローレル販売会社へ。